福岡市立歴史資料館研究報告　第五集　一九八一年三月

旧下座郡・夜須郡出土の鏡二面

―山田正修氏資料―

三島格
後藤直

一、はしがき

本研究報告第四集において、旧秋月藩出身の山田新一郎氏（元治元年―昭和二一年）の蒐集された資料を紹介する短文を発表した。[1] その後、拙文が機縁となり御一族の山田秀三・加藤晋・山田正俊・田辺正彦の各氏[2]から、それぞれ有益な御教示を得た。

その中で特記すべきは、山田正俊氏が曽祖父山田正修氏遺愛の鏡鑑二面を蔵され、それぞれの出土地が、朝倉地方であることを、教示いただいたことである。従来の関係地名表などになかった新しい所見であり、学界を益するところが多いと考える。本文は主として、前述の二面を紹介することを目的とするが、併せて註一の報文の訂正と、正修氏および田辺正彦氏の父君敏夫氏（山田新一郎氏の弟）の蒐集資料について、簡記する。執筆分担については、従来の行きがかり上、一・二・三を三島が、四を後藤が執筆した。

二、山田新一郎氏資料解説の訂正と山田正修・田辺敏夫氏資料について

註一書において同氏資料を解説した折、①「次」「秀」の書き入れについて推定をのべたが、次は山田次郎氏、秀は山田秀三氏[2]の書き入れであるとの教示を、御本人である秀三氏から得た。②従って、三葉の描図は山田新一郎氏の筆でなく、次郎・秀三氏の筆であると訂正する。③ただし、父君新一郎氏の意図により描かれたこと

はむろんであり、各葉の註記も同氏の筆で、この点についての記載は訂正を要しない。

山田正修氏について、秀三氏より教示を得たことを、簡記する。同氏は秋月藩士で廃藩後に朝倉郡弥永に移り、福岡県会副議長・夜須郡長などを歴任。好古の士で近くの農家からとどけられた遺物が、縁の下などに多くあったという。事実、秀三氏から寄せられた資料の中に、石器の写生図・中国鏡の模写図などがある。田辺正彦氏蔵の敏夫氏資料は、おおむね縄文・弥生・古墳時代の遺物で、現在では出土地名も明かであり貴重であるので、整理しておく必要があろう。小田（古墳?）と地名を註記する遺物に、とんぼ（蜻蛉）玉数個があるが、古墳時代出土のそれではなく、近代に台湾などから将来された、可能性が強い。敏夫氏は兄新一郎氏の影響をかなり受けていると、正彦氏はいわれた。ともかく、山田氏の家系の中に好古の士が多く出、かつ遺物があまり散乱することなく、保存されていることは、稀有のことであり今後の保存をお願いしたい。

三、出土地について

一、内行花文銘帯鏡（第1図1）

㈠箱書に「大形鏡　筑前下座郡平塚村古墳中ノ石棺ヨリ出ツ、朱墨ナドニテ赤黒クナリ居タリト」とある。下座郡は現在の甘木市に含まれ、平塚も現存。

㈡地名平塚を指標にとり、註三書によって関連遺跡をあげるが、一世紀を閲した現在では、出土地については特定しがたい。

①栗山遺跡（平塚字栗山）

②福田町二塚石棺（平塚二塚）

③平塚遺跡（註三書附図による）

いずれも弥生時代遺跡で、中には①のごとく、島田寅次郎・中山平次郎氏らの調査をうけ、後にさらに朝倉高校の調査を受けた、学史上著名な甕棺遺跡もある。土地の人であり、他の遺物には通称名まで註記した正修氏が、平塚とのみ記す点を重視すれば、③の平塚遺跡が可能性が強いともいえる。

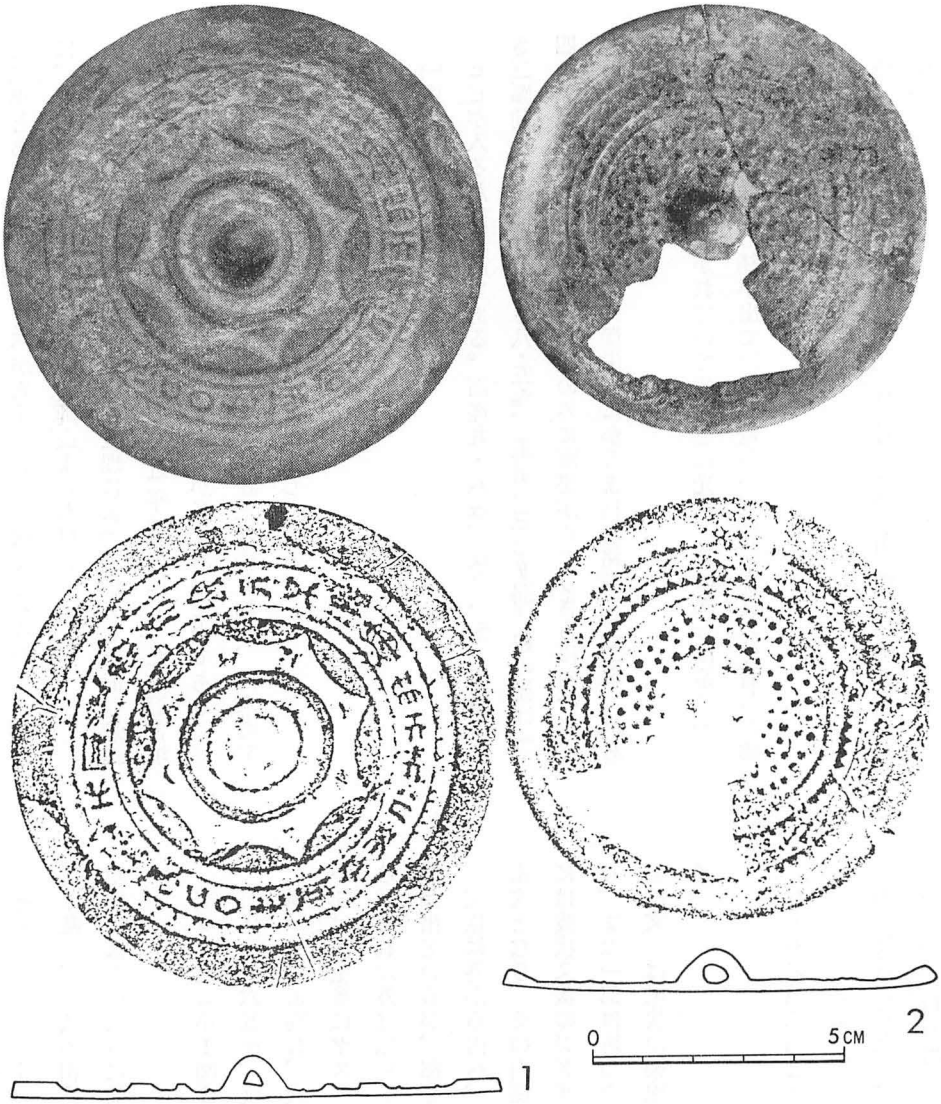
㈢内行花文鏡の出土地を註三書によって、参考として附記する。ただし、すべて異地点である。

①朝倉町外隈遺跡　倣製　径八・六㎝　箱式石棺出土。

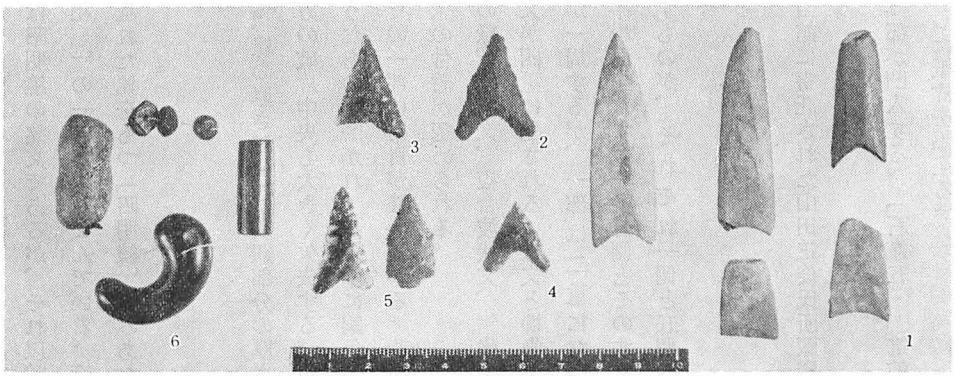
②朝倉町ウラ山遺跡　二面出土　a＝舶載、五分の一の残片、推定径一四・九㎝、穿孔あり。b＝倣製、径八・六㎝、ともに箱式石棺出土。

二、珠文鏡（第1図2）

㈠箱書に「小形破鏡　筑前夜須郡弥永村仙堂文庫蔵ヨリ出ツ此辺石器物多ク出ツ」とある。田辺正彦氏によれば、仙道（堂）という小字は現存するが、文庫蔵という地名は知る人もないという。なお、本鏡につけられた紙片によれば俗称文庫蔵とあり、さらに明治



第1図　1：下座郡平塚村出土　　2：夜須郡弥永村出土



第2図　石鏃と玉　1平塚村，2飛弾国，3美濃国，4弥永村，
5武蔵国，6弥永村

二二年とあるのは、正修氏が入手された年次であろうか。ちなみに、この年次はさきの島田・中山両氏よりも早い。

㈡仙道という小字は、農地の区画整理によって消失した旧往還道より山手の山麓にいたる地域をさし、近年著名になった仙道古墳も、同域内にある。域内にはかつて古墳が多くあった由である。

㈢異地点ではあるが、珠文鏡（倣）は註三書によれば、杷木町宝満宮境内・甘木市小塚本古墳などで出土している。

四、鏡について

㈠内行花文銘帯鏡（第1図1）

ヒビが入るが完形品である。面径九・八㎝、反り一㎜、平縁の厚さ三㎜前後、鈕部分の厚さ八・五㎜、重量一三〇g弱。鈕の径は一・四㎝。縁の幅は約八㎜。円鈕座の外に圏帯がめぐりさらに内行花文がめぐる。これと縁の間に櫛歯文にかこまれた銘帯（二二字）がある。

鏡面は出土後に磨かれていて灰白色に光り、銹の部分は茶色っぽい。背面には緑色の銹が出ている。銹の一部に繊維質の付着した跡らしいものがみえる。

銘文は

輝 象 而 □（光カ） □ 毋 相 忘 □（矢カ） 日 月 心 □ 而 願 忠 然 壅 塞 而 不 □（泄カ）

とよめる。「日月」以下は昭明鏡の銘文であるが、それ以前の銘文は乱れ、「久不相見長毋相忘」の一部が入りこんでいる。管見の範囲ではこのように前半の乱れた銘をもつ「昭明鏡」はみあたらない。

㈡珠文鏡（第1図2）

面径八・六五㎝、反り二㎜、縁の厚さ三・四㎜、鈕部分の厚さ八・二㎜。二片に割れ、大きい方の破片中央も大きく欠失する。鏡面の一部は出土後にヤスリのようなもので磨かれ、その中に銅色がみえる。それ以外は緑銹をおびその一部に布目が残っている。背面にも銹が出ているが、部分的に朱の付着が認められる。

文様は外から内へ、素文の縁、鋸歯文、複合波状文、鋸歯文、櫛歯文となり、その内側に珠文が四重に配される。珠文と櫛歯文の間には波状文状のジグザグ線が一周するが、一部は二重になっており、また一部は鋳つぶれて平坦面をなす。一番外側とそのすぐ内側の珠文には尾状の細線を出すものが、それぞれ一個と五個みられる。

なお右の鏡二面とともに当館に寄託された山田正俊氏所蔵資料をあげておく（第2図）。

(1)磨製石鏃五点。すべて其部が凹入する。「石鏃五□（虫喰）筑前国下座郡平□（虫喰、塚カ）村所出」と墨書した紙片を添える。

(2) 打製石鏃　黒曜石製三、サヌカイト製二。二点は「二片　武蔵国産出」、一点は「飛弾国ニ出ツ　石鏃　福井大岩貫一所寄贈」、一点は「石鏃　美濃国恵那郡福岡村大字高山小字若山ニ出」、一点は「石鏃　筑前国夜須郡弥永字石原町ノ田ノ中ニ拾取」と墨書した紙片をそえる。

(3) 碧玉製勾玉一、管玉一、ガラス小玉一。この三点に暗灰色石製管玉状のもの一点と石質不明小玉状のもの二点を加えて一連としている。「筑前国夜須郡弥永村字□山石窟ニ出ツ」の紙片を添えている。

この他に弥永採集の黒曜石剝片と、石斧と誤認した伊豆国拾得の礫片および田原坂採集の小銃弾各一点がある。

謝辞　執筆にあたって、山田秀三氏は新一郎氏資料・正修氏について、山田正俊氏は新一郎氏による「出土品の説明書・写生図」「山田正修遺愛古鏡二」のコピーおよび写真などをそれぞれ送付され、教示を受けた。さらに正俊氏は鏡二面を加藤晋氏に託され、筆者らの実見を許された。田辺正彦氏は前回に引きつづき、現地踏査・案内および敏夫氏資料の実見を許された。また大己貴神社は鈴の実見を許された。併せて深甚なる謝意を表す。

註

(1) 三島格「豊前・筑前其他出土考古品図譜の関連および追加資料」福岡市立歴史資料館研究報告　四　一九八〇年　福岡。

(2) 山田氏家系を略記する。山田正修(十代)は新一郎の父。次郎・秀三・晋は新一郎の次・三・四男。田辺正彦は新一郎の弟敏夫の長男。正俊は新一郎の長男勝磨の子息。

(3) 朝倉高等学校史学部『埋もれていた朝倉文化』一九六九年　甘木。